

「～きる」及び「完～する」における数量詞で表される計測経路の解釈について

著者	藤巻 一真
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
号	26
ページ	25-44
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001767/

「～きる」及び「完～する」における数量詞で表される計測経路の解釈について

藤巻 一真
(神田外語大学)

要旨

本稿は、事象の限界性について両義的である「食べる」や「走る」などの動詞に、「～きる」及び「完～」を用いて、その事象の終了時点を組み込み「食べきる」「完食する」としたとき、共起する数量詞が表す計測量（「3杯食べきった」及び「3杯完食した」における「3杯」）の解釈について新たな事実を提出し考察する。「3杯食べた」の「3杯」においては、事象が終了する時点で「測り取った数量（達成量）」になるとされるが（北原（1999）、森山（1988）、中村（2001）、岩本（2008））、「3杯食べきる」においては「3杯」は「予定した数量」である（姫野（1999））。この解釈が、数量詞が名詞修飾になっている場合、及びヲ格を伴う数量の場合にも成り立つことを示す。さらに「完～する」においても同様になることを示す。これに基づき「～きる」と「完～する」は、事象投射理論（岩本（2008））を用いて「(限界的な)消費動詞」と捉えられる可能性を示唆する。

キーワード：(非)限界的事象、～きる、完～する、(目標とされる)達成量、(限界的)消費動詞

1. はじめに

アスペクトの関与する現象を考えると、述語や項及び付加詞が全体として表す事象 (event) が限界点を持つものかどうか、つまり事象の限界性が重要であり、それが関わる現象（例えば、進行形の意味解釈や副詞句などとの共起関係や、数量詞の解釈など）について、例えばVendler (1967) を始め Verkuyl (1972), Dowty (1991), Tenny (1994) など、日本語については金田一 (1950, 1955)、森山 (1988)、奥田 (1977)、工藤 (1995)、北原 (1999)、中村 (2001)、岩本 (2008) など多くの研究がなされている。事象が限界性を示すとき、その限界性がどこから来るのかを解明するのが基本的な課題とさ

れる。限界性の源となり得る要素として、先ずは述語動詞自身が挙げられ、そもそも述語動詞の意味に限界点を含むものは「限界動詞」、そうでないものは「非限界動詞」などと呼ばれ区別されてきた。しかしながら、述語動詞が限界点を持つだけでは、事象が限界性を示すとは限らないことが観察され、述語以外の他の要素である項や付加詞が持ち得る（付け加える）限界性も、事象の限界性の決定に大きく関与することが明らかにされてきた。中でも興味深いのは、非限界動詞が限界点を含む定名詞句を取るとき、(1)にあるような限界性に関して両義性を示す現象である。

- (1) a. Bill walked the Appalachian Trail in/for two months.
 b. Sue played the sonata in/for ten minutes. (Tenny 1994)

Tenny (1994) は、一定の空間経路を（曲や本なども含めて）、時間軸に沿って進む事象を「経路動詞」と呼び、the Appalachian Trailやthe sonataを「計測経路」と呼んでいる。walkやplayはそもそも限界性を示さない動詞であるが、計測経路が限界点を含んでいる（始点と終点がある）ので、終点まで達した場合に事象が限界性を示し、期限句であるin two months/ten minutesとの共起が可能になる。日本語においても工藤（1995）、北原（1999）、中村（2001）、三原（2004）、岩本（2008）等で詳しく議論されている。以下(2)のような例であるが、「歩く」「読む」などは動詞そのものは非限界動詞であるが、ヲ格名詞句が限界点を含む定名詞句（つまり限界点を含む計測経路）である。そして、限界的な計測経路を含む事象全体については、必ずしも限界的ではなく期間句の「1時間」及び期限句の「1時間で」と共起し、限界性に関して両義的であることが観察されている。

- (2) a. 2キロの散歩コースを1時間/1時間で歩いた。
 b. 『徒然草』を1学期間/1学期で読んだ。
 c. 1500mを4分/4分で走った。¹

これに対して、次のようにヲ格を伴わない、事象の経路の長さを計測する量（「40キロ」や「20ページ」）が付加詞として現れる場合、事象は限界的であり、

期間句の「2時間」とは共起しない(北原(1999)、中村(2001)、岩本(2008))。

- (3) a. 太郎は*2時間/2時間で40キロ走った。
b. 太郎は「徒然草」を*2時間/2時間で20ページ読んだ。

また、岩本(2008)においては、次の例における「800mを」と「800m」の意味の違いを議論している。

- (4) a. 太郎は800m(コース)を走った。
b. 太郎は800m走った。

(4a)の「800m(コース)を」は、「走る」事象とは独立に存在するものであり、(4b)の「800m」は「走る」事象の終了時点で、走った距離は800mだったという解釈になるということである(pp.127-128)。

本稿では、この観察とは異なり、ヲ格を伴わない、事象の経路の長さを計測する量が、事象の終了時点での計測量ではなく、初めから限界的経路として事象に組み込まれていると考えられる(5b, c)の例を中心に考察する。(5a)の「3杯」は、前述のように「食べる」事象の終了時点で測り取った量である。一方、(5b, c)の「3杯」は、初めから事象の計測経路の長さとして解釈され、「3杯」食べ終えた時点で事象が終了する。「3杯食べきる」や「3杯完食する」においては、それまでは、「食べきった」や「完食した」といえない事象である。

- (5) a. 太郎はラーメンを3杯食べた。
b. 太郎はラーメンを3杯食べきった。
c. 太郎はラーメンを3杯完食した。

本稿の構成であるが、まず、第2節では先行研究における計測経路と事象の限界性に関する観察と分析について、本稿に関わる点を取り上げ後の分析の基礎とする。第3節では、本稿で中心的に取り上げる、複合動詞の「～きる」と漢語動詞の「完～する」の基本的な意味と限界性に関する特徴を概観し、計測する量の解釈について新たな観察を提示し、その特徴を記述する。最後に第4

節にて、「～きる」及び「完～する」は、事象を限界化しているのであるが、それらを事象投射理論（岩本（2008））の枠組みにおける消費動詞の「リンゴを3個食べる」と同様に捉える可能性について示唆する。

2. 先行研究

2.1 数量詞と事象の限界性

目的語のヲ格名詞句や移動動詞におけるヲ格の経路が事象の限界性とどのように関わっているかについての分析（北原（1999）、中村（2001）、岩本（2008）など）から、概略以下のことが明らかになっている。

- (6) a. ヲ格名詞句（目的語や経路）は、それ自体では事象の限界性を決定しない。
- b. 数量詞が名詞修飾として現れる場合、事象の限界性を決定しない。
- c. 数量詞が副詞として現れる場合、事象が限界的になる。

ここでは、これらを詳しく分析している北原（1999）を基本として、中村（2001）や岩本（2008）の重要なデータを確認し、後の分析に用いることとする。

先ず、北原（1999）では工藤（1995）の限界性に関する動詞の分類に基づき、その一部を「限界動詞」と「非限界動詞」として扱っている²。

- (7) a. 非限界動詞：歩く、読む、食べる、走る
- b. 限界動詞：割る、入れる、消す、壊す

さて、ヲ格名詞句であるが次のように（特）定の名詞句の場合、限界性に関して両義的になることが観察されている。

- (8) a. 太郎はその舗道を30分/30分で歩いた。
- b. 次郎はLGBを3日間/3日間で読んだ。
- c. 太郎は道を30分/??30分で歩いた。
- d. 次郎は本を3日間/?3日間で読んだ。

(8) における時間の付加詞であるが、一般的な呼び方に従って「30分」「3日間」を期間句（北原の「Q期間」）と呼び、「30分で」「3日間で」を期限句（北原の「Q期間デ」）と呼ぶことにする。北原（1999）において「歩く」「読む」は基本的には「非限界動詞」であり、(8c, d) における不定のヲ格名詞句（例「道を」）との対比から、(特) 定性のヲ格名詞句（例「その舗道を」）には限界性が潜在的に存在し、それを期限句が「Telicな概念を顕現させる機能を持つ（p.171）」とされる³。

次に、数量詞と事象の限界性の関係であるが、北原は数量詞が名詞修飾になっている場合と、動詞の直前に現れ（ヲ格の付かない）副詞として働く場合を区別する。前者の名詞修飾の数量詞（例「3冊の」）は、事象の限界性を必ずしも決定しないが、後者の副詞として働く数量詞（例「50ページ」）は、限界点までに達成された数量を表し、Tenny（1994）でいう「アスペクト限定」の機能を持つ。このアスペクト限定の機能を果たす数量詞を「達成量」と呼ぶ。具体例を見てみると、(9) にあるように、数量詞がヲ格名詞句の修飾語としてNP内にある場合、事象の限界性に関して両義的である（基本は非限界的である）⁴。（以下の例は、北原（1999）の（27）と（28）をまとめて表示してある。）

- (9) a. 太郎が2.5kmの舗道を30分/30分で歩いた。
b. 次郎が2冊の本を3時間/3時間で読んだ。
c. 次郎が100ページの本を3時間/3時間で読んだ。（北原 1999:176）

一方で、(10) にあるように数量詞が副詞として現れる場合に、つまり北原のいう「達成量」があると、ヲ格名詞句が事態を測り取り、これにより、もともと非限界的な事象であっても限界的になり、期間句と共起しない⁵。

- (10) a. 太郎が5分で/*5分その舗道を500m歩いた。
b. 次郎が2時間で/*2時間LGBを50ページ読んだ。
c. 次郎が2日で/*2日間三郎の買ってきた本を3冊読んだ。
(北原1999: 178)

さらに、(11) のようにもともと限界動詞の「割る」「入れる」などはヲ格名詞句の定性に関わらず限界的な読みになる。（ただし、期間句と共起する場合の、「反復の解釈」は分析対象から外されている。）また、(12) にあるように数量詞が名詞修飾になっていても、(9) と異なり限界的である。

(11) a. 太郎が皿を3枚割った。

b. 太郎が2秒で/*2秒間皿を3枚割った。

(12) a. 太郎が3枚の皿を2秒で割った。

b.*太郎が3枚の皿を5分間割った。 (北原1999: 178-179)

(12) の解釈であるが、重要なのは動詞の前に「達成量」の数量詞が付いていない場合であっても、名詞修飾の数量を全て「割った」という解釈になるという点である。（達成量が付いているときは、その分量であり、部分解釈と呼ばれている。）

(13) a. 太郎が3枚の皿を3枚とも／全部割った。

b. [対格名詞句 + √ + 限界動詞]

(12) においては、「音声的には空である副詞の達成量Qが存在する (p.188)」とし、(13b) のように普遍数量詞 (√) を仮定する。また、対格 (ヲ格) 名詞句の「3枚の皿」は「割る」事象を計測する最小値から最大値を表すスケールと北原 (1999) は捉えている⁶。これは、(14) で明らかのように、非限界動詞に期限句 (期間Qデ) が付加されて限界的になるような場合にも当てはまり、達成量が現れない場合は、ヲ格名詞句が表す分量の「全て」に関して「歩いた」「読んだ」となるとしている。

(14) a. 次郎が2冊の本を3時間で読んだ。

b. 次郎がLGBを2時間で100ページ読んだ。

c. [特定の／定の対格名詞句 + √ + 期間Qデ + 非限界動詞]

以上をまとめると、「達成量」が副詞として現れるとき、それがアスペクト

限定し、限界的な事態になるということである。

これまで見てきた「達成量」というのは、副詞である。これについて、先に(4)で触れた点(岩本(2008:128)における重要な区別)を確認しておく。それは、ヲ格が付くかどうかで達成量として解釈されるか、つまり、限界的な事態として解釈されるかどうかが決まるという点である。例えば、(15)において「1500m走った」における「1500m」は北原(1999)や中村(2001)と同様に必ず事象を限界化するが、ヲ格の付いた「1500mを」は事態(以下、事象と呼ぶ)を必ずしも限界化するものではないとの観察をしている。(下線部筆者付加)

- (15) a. 太郎は1500m*4分/4分で走った。
b. 太郎は1500mを4分/4分で走った。

期間句と期限句との共起関係を見れば、「1500mを走る」は期間句の「4分」とも共起可能であり、「1500mを」は事象を限界化しているとは言えない。北原の用語を用いれば「1500mを」は達成量ではないということになる。

ここまでをまとめる。(計測経路に關与する)数量詞と事象の限界性に関して、もともと動詞の限界性に関して両義の「走る」を例に取ると概略以下のようになる。

- | | |
|----------------|--------------|
| (16) a. 走る | [非限界, 限界] |
| b. 2キロ走る | [*非限界, 限界] |
| c. 2キロのコースを走る | [非限界, 限界] |
| d. 2キロ(コース)を走る | [非限界, 限界] |

2.2 事象の限界性と計測量の解釈

前述の「40キロ走る」の解釈に関連して、「40キロ」の解釈について、岩本(2008)の観察と説明を取り上げる。次の(17)の例における「800m」と「10分」の解釈に焦点をあてる。まず、この二つは、同様に事態の開始から終了までを、それぞれ空間的と時間的に計測したものであり、両者の共通の特性として「走る」という「非限界的な事象を限界化する」働きがあるとしている⁷。特に、時

間的に計測した「10分」も事象を限界的にしている点は、注意をしておきたい。

- (17) a. 太郎は800m走った。
b. 太郎は10分走った。

次に注目したいのは、「800m」と「10分」の解釈であるが、それぞれ「走り終えたとき、800mだった」「走り終えたときに10分経っていた」ということであり、(18)にあるように、初めから「走る」という事象とは独立して存在する「800mのコースや道（経路）」を走ったということではなく、また、初めから「走る」と決めていた「10分」を走ったということでもないという点である⁸。これは、前述の(4)と(15)で見たように、ヲ格が付き経路を表す例は多義である点と異なるとされる。

- (18) a. 太郎は800mのレースを走った。
b. 太郎は800mを走った。

岩本（2008）によれば、これらの場合、初めから「走る」事象とは独立して存在していた「800m（のレース）」であり、(19)のように走り終えた時点で計測された「走った」（実際に走った）距離の「500m」（や「途中まで」）を付加することができる。

- (19) a. 800mを500m走ったところで転倒した。 （岩本2008: 128）
b. 太郎は800mを途中まで走った。

ここで、以下の議論において考察対象とする同様の例を挙げておく。

- (20) a. 太郎は小説を100冊売った。 ⇒ 売り終えた時、100冊だった。
b. 太郎は小説を2冊訳した。 ⇒ 訳し終えた時、2冊だった。
c. 太郎はラーメンを3杯食べた。 ⇒ 食べ終えた時、3杯だった。

岩本（2008）では、何れの場合も、「100冊」「2冊」「3杯」は、初めから限界

的な数量として存在していたのではなく、事象が終わった時点での計測された数量であり、この事象を計測し終えた時点での数量となり、事象を限界化する関数（COMPと呼ばれる関数）によって定義される表現とされる⁹。

以上の点を踏まえて、第3節にて「～きる」と「完～する」において計測される数量の解釈について考察する。

3. 限界点の語彙化と計測量の解釈

本節では、もともとそれが表す事象が限界性に関して両義的である動詞（例えば、「書く」「売る」「走る」など）において、限界的事象を表すようになる2種類の過程を取り上げる。一つは、(統語的)複合語の「～きる」であり、もう一つは、付加詞の「完全に」が動詞に編入された結果、限界点が語彙化され、事象が限界的になる「完～する」である。「売る」を例に取れば、それぞれ、「売りきる」「完売する」になるが、元になる動詞の「売る」が表す事象は、限界性に関して両義的であるのに対し、これらが表す事象は限界的である点を確認する。これに基づき、計測量の解釈について記述し考察する。

3.1 複合動詞の「～きる」

まず、「～きる」について、限界性に関しては両義的な「書く」「売る」「走る」と複合動詞を形成する例を取り上げる。これらの動詞が表わす事象を限界的にする方法として、アスペクト的意味を持つ動詞を後項に取る複合動詞が考えられる。例えば、「～きる」「～あげる」「～ぬく」「～つくす」などがある¹⁰。これら以外にも、事象の完了を表す「～し終える・終わる」がある¹¹。本稿では、「～きる」に絞って考察する。まず、「～きる」の基本的な意味を姫野(1999/2018)から引用する。(強調は筆者付加)

(21) a. 「～きる」:

継続動詞について行為が完遂することを表すものと、瞬間動詞について極度の状態に達することを表すものである。

b. 「きる」は、行為の単なる終了を表すのではなく、行為者の予定どおり(質、量ともに)完全に行われることを意味している。

c. 「～きる」は、“作業量”とでもいうべきものを数量で表せる類いの動

詞、例えば「3個食べる」、「5キロ走る」、「7ページ読む」の類いの動詞にはほとんどつく。

（姫野1999：aはp.175；bとcはp. 177）

以上のような特徴を持つ「～きる」は、影山（1993）などの複合動詞の研究として多くの研究がなされているケースであり、限界点を含むアスペクト的な（補助）動詞の「きる」が、非限界的な動詞に付加され限界的な事象を表す複合動詞となる例であり、生産性が高い。なお、(21)の強調を施した点の「予定された事象」と「作業量」（北原（1999）の「達成量」）が後に関係する。

この予定された“作業量”を含む「～きる」であるが、以下のように期限句との共起が可能であり、限界的な事象と言える。

- (22) a. 太郎は {*3日間／3日間で} 100冊の小説を売りきった。¹²
b. 太郎は {*3ヶ月間／3ヶ月間で} 2冊の小説を訳しきった。
c. 太郎は {*3分間／3分間で} 3杯の激辛ラーメン食べきった。

次に生産性は高くないが、事象の限界点を示すと思われる付加詞の「完全に」が動詞そのものに組み込まれ語彙化されている「完～する」を取り上げる。

3.2 漢語動詞の「完～する」

まず、漢語動詞の中に「完全に～する」を表す「完」のつくものがある¹³。（意味は『広辞苑』第六版より）

- (23) a. 完売する： 一つ残らず売り尽くすこと
b. 完訳する： 全文を翻訳すること：また、その翻訳
c. 完食する： 卓上に置かれた食物をすべてたべきること
d. 完走する： 最後まで走りぬくこと（下線は筆者付加）

(23a-d)において、「売る」「訳す」「食する」「走る」が表す事象は、もともと限界性に関しては両義的であるが、これらに「完全に」が意味的に動詞に

編入され（「完一」が付加され）ると、動詞が表す事象自体が限界化される。つまり、「完一」により動詞の内部に「限界点」が語彙化されたことになる。このことは、以下に示すように期限句とは共起可能であるが、期間句とは共起不可能であることから確認できる。

- (24) a. 太郎は {*3日間／3日間で} 100冊の小説を完売した。
b. 太郎は {*3ヶ月間／3ヶ月間で} 3冊の小説を完訳した。
c. 太郎は {*3分間／3分間で} 3杯の大盛りカレーを完食した。

以上、限界点が語彙化される2つのケースを概観した。以下、これらを元に、これまでに観察されている例と対比しながら、新たな観察を提出し、計測経路の数量詞が表す解釈について考察する。

3.3 「～きる」と「完～する」における計測量の解釈

ここでは数量詞が事象を計測する場合の解釈について見る。第2節で簡単に言及したように次の例における「1500m」「100冊」の解釈に注目してみる。（(25) は再掲）

- (25) a. 太郎はトラックを1500m走った。
b. 太郎は小説を100冊売った。

岩本（2008, 2010）によれば、何れの場合も「1500m」「100冊」は初めから限界的な数量として存在していたのではなく、事象が終わった時点での計測された数量ということである。

これに対して、以下で「走りきる」「完走する」において現れる「1500m」の解釈は異なることを見ていく。まず、「～きる」の例として「走りきる」「訳しきる」「食べきる」を見てみる。

まず、(26) においては、期限句の「～で」とともに共起が可能であり、「売りきる」などが、（ここでは、詳細は別にして「きる」によって何らかの方法で[+限界]（[+bounded], 以下[+b]）が導入される）として限界的事象となっているからである。さて、数量詞の解釈であるが、(26a)において「1500m」は、「1500m

走った」における事象が終了するときに測り取った数量ではなく、初めからそこを目指して走り、その限界点に至った時に初めてその事象が終了するものである。前者を「終了時点の達成量」というならば、後者は「目標とされた達成量」である。(26b,c)における「2冊」「3杯」も同様である¹⁴。

- (26) a. 太郎はトラックコースを4分間で1500m走りきった。
- b. 太郎は長編小説を10日間で2冊訳しきった。
- c. 太郎は激辛ラーメンを5分間で3杯食べきった。

次の例(27)においても同様に、(25)の「1500m走った」における「1500m」の解釈とは異なる。まず、次の例を見るにあたり、繰り返しとなるが注意点を確認しておく。以下の例では、計測経路の「100冊の小説を」自身は、これまでの北原(1999)、中村(2001)、岩本(2008)の観察により、事象の限界性について何も決めない¹⁵。(9)で見たように名詞修飾になっている「1500mの」「2冊の」「3杯の」は事象の限界性について、それ自身は決定しないということであった。(例えば、「2冊の小説を訳した」においては「2冊の小説を途中まで訳した」とも言えることから、これらの数量詞は限界性に関与していない。)これを踏まえて(27)を見てみる。

- (27) a. 太郎は1500mのコースを(4分間で)走りきった。
- b. 太郎は2冊の長編小説を(10日間で)訳しきった。
- c. 太郎は3杯の激辛ラーメンを(5分間で)食べきった。

これらの例では、「1500m」「2冊」「3杯」で表わされる計測経路は限界点にまで達したことを意味している。そして、この計測経路の限界点は、初めからそこに至ることを目標としている(姫野(1999)の「予定どおりの」)ものであり、そこに至って事象は始めて終了するものである。この点は、(26)と同様であり、名詞修飾となっている数量詞であるにも関わらず、また、期限句がなくとも、限界的な事象となっている点が「1500mのコースを走った」とは異なる点である。

次に、「～きる」と同様の振る舞いをする別の例として「完～する」におけ

る解釈を見てみる。「～きる」と同様に以下のように動詞の前に置かれるヲ格の付かない数量詞も、事象が終了した時点で測り取った数量ではなく、初めからそこに至ることを目標とされた達成量の解釈となり、事象は限界的である。

- (28) a. 太郎はトラックコースを（4分間で）1500m完走した。
- b. 太郎は長編小説を（10日間で）2冊完訳した。
- c. 太郎は激辛ラーメンを（5分間で）3杯完食した。

この場合も期限句の「～で」との共起可能であるが、名詞修飾になっている「1500mの」「2冊の」「3杯の」は、本来ならば限界点に至ったことを表さなくてよいが、(29)においてはその限界点まで至っていなければならない。

- (29) a. 太郎は1500mのコースを（4分間で）完走した。
- b. 太郎は2冊の長編小説を（10日間で）完訳した。
- c. 太郎は3杯の激辛ラーメンを（5分間で）完食した。

次に、「ヲ格の計測経路」について見てみる。まず、(30a)にあるように「～きる」や「完～」が付かない「訳す」などの時には「2冊を」は、限界性に関しては関与せず、事象全体も限界事象ではなかった。しかし、(30b, c)にあるように「訳しきる」「完訳する」になると、「ヲ格の計測経路」も限界点を表し、さらに、それは初めから目標とする限界点と解釈される。

- (30) a. 太郎は長編小説2冊を（途中まで）訳した。
- b. 太郎は長編小説2冊を（*途中まで）訳しきった。
- c. 太郎は長編小説2冊を（*途中まで）完訳した。

最後に北原（1999）、岩本（2008）で取り上げられている「部分解釈」に関して見てみる。まず、元になるのは次のような例である。

- (31) a. 太郎は1500mのコースを途中まで／1200m走った。
- b. 太郎は100冊の本を80冊売った。

c. 太郎は5杯のラーメンを3杯食べた。

それでは、「～きる」と「完～する」において部分解釈が可能であるか見てみる。

(32) a. *太郎は1500mのコースを1200m {走りきった／完走した}。

b. *太郎は100冊の本を80冊 {売りきった／完売した}。

c. *太郎は5杯のラーメンを3杯 {食べきった／完食した}。

まず、確認となるが、名詞修飾の「1500mの」「100冊の」「5杯の」が事象の量における最小値からその最大値を表し、注6にあるように、限界事象の「3枚の皿を2枚割った」においては、部分解釈が可能であった（北原（1999））。しかし、「～きる」「完～する」においては、(32)にあるように、基本的にそれが不可能に思われる¹⁶。

このことは、「～きる」「完～する」においては、「目標とする達成量」（それがたとえ名詞修飾の場合でも）を達成したときに初めてその事象が終了することが必要であるということを表している。

ここまでの観察を「訳す」の例に、まとめると以下のようになる。

(33) a. 太郎は3冊の長編小説を訳しきった／完訳した。

b. 太郎は長編小説を3冊訳しきった／完訳した。

c. 太郎は長編小説を3冊を訳しきった／完訳した。

d. *太郎は3冊の長編小説を1冊訳しきった／完訳した。

(34) a. 計測経路が（33）におけるいずれの場合も、「～きる」「完～する」においては、数量詞が表わす量の計測経路の限界点に至ったことを表す。

b. その数量詞の解釈は、事象が終了する時点で測り取ったものではなく、初めからその数量の限界点に至ることを目標（予定）としている達成量である。

以上、第3節では、「～きる」と「完～する」が限界的事象であることを確

認し、これらにおける数量詞で表される計測経路の解釈について、これまでに森山（1988）、北原（1999）、中村（2001）、岩本（2008）で観察された事実と比較しながら、それらとは異なる解釈となることを示した。姫野（1999）における「～きる」の記述に基づく観察と共に、追加として「完～する」における新たな観察を提出した。

4. 限界的消費動詞としての可能性と残る課題

前節までの観察と記述について、理論的どのように説明するかと課題がある。紙幅の関係で、詳しく論ずることができないが、その方向性を以下に示唆する。

それは、「～きる」及び「完～する」は、「限界的消費動詞」と同様な事象と捉える可能性である。岩本（2008, 2010）は、消費動詞以外の経路動詞の「10分走る」と消費動詞の「リンゴを食べる」との共通点として、「経路動詞が表わす事象が、計測経路の内部に沿って進行するように、「食べる」のような消費動詞が表わす事象も対象の内部に沿って進行する。このように、経路動詞と消費動詞は概念的共通性を持っているのである」（岩本（2010: 56））と述べている。この共通点と併せて、「～きる」に関して注14にも挙げた、石井（1988）の指摘として姫野が説明している「客体のゼロへの変化」ということに着目してみる。もちろんこれは、「完～する」にも当てはまるが、「客体のゼロへの変化」とは、「～きる」「完～する」における数量詞で表される「目標とされた達成量」は、その分量が「ゼロになるまで」当該の事象が継続され、その（ゼロになった）時点で事象が終了するということである。この「ゼロになるまでの変化」が、数量詞で表される達成量が消費されていくことを意味している。

まさにこの点は、岩本（2008, 2010）における消費動詞の特徴であり、「消費される物体の0次元的部分が「存在しなくなる」ということを断面とすること」（岩本（2008: 239））で説明が可能であろう。

仮にこの方向性が正しいとすると、「～きる」「完～する」の「～」に用いる動詞の種類を問わず、「～きる」「完～する」は、消費動詞と捉えられることになる。つまり、「本を100冊売りきる」は、消費動詞の内、限界的な事象の「リンゴを3個食べた」と同様に捉えることができるのではないかということである。ただし、両者における達成量の解釈には、前述のように相違点があったのであるから、その差をどうとらえるかという課題、つまり、「初めから目標と

する限界点」をどう導入するかという課題が残る。これに関しては、別稿にて論じる予定である。

5. まとめ

本稿では事象の限界性が何に起因するかという問題の中で、限界的な事象における数量詞の解釈について考察した。具体的には、まず、限界性に関して両義的な「売る」を用いた「100冊の本を売る」「本を100冊売る」「本100冊を売る」の3タイプの分析として北原（1999）、岩本（2008）を中心にその特徴を概観した後、日本語において限界点が語彙化される2種類のタイプ（「～きる」「完～する」）の限界的事象における数量詞の解釈について新たな観察を提出し、数量詞の3種類の現れ方のどのタイプにおいても「目標とされる達成量」となり、限界点に至って初めて事象が終了することを見た。また、「～きる」「完～する」に関して、理論的には事象投射理論（岩本（2008））における消費動詞としての分析の可能性を示唆した。

謝辞

本稿は故井上和子先生主催の研究会（通称井上ゼミ）における発表（平成26年3月28日、及び平成26年7月26日）に端を発し、その一部を取り上げ、事象の限界性を中心に発展させ、大幅に改訂し加筆したものである。20年以上の長期にわたりゼミにて我々の小さな話に耳を傾けて下さり、導いて下さった井上和子先生にこの場を借りて心より感謝申し上げます。本稿に対して、査読者の方から有益なコメントを頂いた。また、岩本遠億氏、浜之上幸氏、上原由美子氏からは、前稿を細かく読んで頂き、貴重なご意見とご批判を頂いた。特に、岩本遠億氏には、理論的観点からまた、経験的事実に基づき、データ及び分析に関して問題点を指摘して頂き、問題をどうとらえるべきか、ご教示を頂いた。ここに感謝申し上げます。中村たか子氏には初期段階の原稿に目を通して頂いた。また、井上ゼミの参加者の長谷川信子氏、遠藤喜雄氏、上田由紀子氏、大倉直子氏、綿貫啓子氏からもご意見及び励ましを頂いた。ここに記し感謝申し上げます。本稿における誤り等は全て筆者に責任がある。

注

1. 「1500mを」とヲ格が伴う場合、事象が必ずしも限界的とはならない事実は岩本（2008）の観察による。
2. 工藤（1995）の分類の「内的限界動詞」である主体動作・客体変化動詞と、「非内的限界動詞」である主体動作動詞（二側面動詞）を、北原はそれぞれ「限界動詞」「非限界動詞」と呼び、分析の対象としている。また、それぞれを主要部とする動詞句を、限界点が存在するTelicな「限界動詞句」、限界点が存在しないAtelicな「非限界動詞句」と呼んでいる。
3. ただし、「本を」「舗道を」のような不特定の場合、Tenny（1994）のいう事態を「測り取る（measure out）」ことができないが、期限句が付くと特定の解釈されるようになり、動詞句も限界的な解釈になるとされる。
4. 中村（2001）にも同様の記述がある。「動作・作用の量を示す句の全てが、終了相か結果相のアスペクト指定を行うわけではない」として、以下の例の「2キロの」「3トンの」は「名詞修飾であって、終了点が達成されたかどうか分からない（p.48）」とする。
 - (i) 2キロのコースを、10分間（過程）、走り続けた（過程）／走り出した（始動）。
 - (ii) 3トンの荷物を、積み続けた（過程）／積み出した（始動）。また、岩本（2008、2010）において、以下のように数量詞が名詞自身を限定している場合も、事象は限界性に関して両義的であるとして、事象の限界化に直接関与する物ではないとする記述がある。
 - (iii) 42.195キロコースを1時間走った。
 - (iv) 21世紀を50年間生きた。事態の開始や終了とは関係なく独立に存在する「21世紀」やマラソンの「42.195キロコース」は事象を限界化するものではない。（岩本2011：62）
5. 森山（1988）では、「太郎が三キロ歩いた」における「三キロ」は過程の終結点を取り上げるとしている。（p.171）「500m」のような移動の距離におけるアスペクト限定については、影山（2010）においても詳しく論じられているので、参照されたい。また、Ishii（1999）では、日本語の2種類の数量詞における遊離（実際はNPのスクランプリングの）可能性と数量詞の解釈について詳しく論じられている。動詞の前の数量詞（例えば「本を3冊買った」の「3冊」）は、ひとつには副詞として「分配／累積的（distributive/cumulative）解釈」があるとされる。後に本稿で扱う「太郎はトラックを1500m走った」の「1500m」や、「10分走った」の「10分」にもこの解釈（累積的解釈）があると判断される。この他に、文頭にある数量詞（「5つ太郎がゲートを開けた」の「5つ」）や名詞句の前にある「の」の付かない数量詞（「5枚答案を破いた」の「5枚」）も副詞として「分配／累積的解釈」になると議論されている。詳しくは、Ishii（1999）を参照されたい。
6. 北原によると、この最小から最大までの間で、「達成量」がない場合、最大値の読み（「最大値まで」）がデフォルトとなる。また、「達成量」の追加により、「3枚の皿を2枚割っ

- た」や「3冊の本を2冊読んだ」のように部分の解釈が可能となる。
7. 岩本（2008）では、以下のように述べている。
「太郎は800m走った」や「太郎は10分走った」などにおける「800m」「10分」はCOMP関数によって定義される表現で、……〔中略〕……なお、「800m走った」の概念的意味は、「走り終えた時、800mだった」ということであり、「800mのレースを走った」ということではない（森山（1988）、上原（2002））。（岩本2008: 127）
 8. 森山（1988）のいう「動作が終わったときに測られる時間、距離、数量」である。また、「800m」は、北原（1999）の「達成量」になるであろう。「10分」を北原が達成量とは呼ばないと考えられるが、事象を限界化している点では、達成量と同じ働きをしている。姫野（1999）には「作業量」とでもいうべき数量（p.177）とある。この時間量の「10分」は、Ishii（1999）で議論された「累積的解釈」を持つ。
 9. 岩本（2008）は、Jackendoff（1996）の構造保持束縛理論の不備を補い、さらに発展させて事象投射理論を展開している。そこでは、いくつかの基本的な関数と、その適用に関する一般的な制約から事象の意味を計算する仕組みが提案されている。事象の（非）限界性や、「ている」の解釈なども、そこで提案された仕組みによって捉えられている。紙幅の関係で、詳しく見る余裕はないので、岩本（2008、2010）を参照されたい。
 10. その他「ぬく」「つくす」などがある。これらの意味的な違いは、姫野（1999）を参照されたい。「つくす」に関しては由本（2005）に詳しい分析がある。
 11. 中村（2001）では、これらをアスペクト指定の関数として捉えている。例えば、「～終わる」は継続動詞（の持つアスペクトの特性の集まり）を入力として、{+終点}（+terminative point）というアスペクト素性を出力として返す。つまり、「～終わる」は継続動詞、例えば「走る」のアスペクト特性群 {+始動点、+過程期間、+/-終了点、-結果期間} を入力としてその中の {+終点} というアスペクト素性を返すことにより、「走り終わる」全体は限界的事象となる。
 12. この例は「～きる」が期間句を取れないことを示しているが、以下にあるように時間量を「達成量」として取れないということではない。
(i) 太郎はトラックを10分間走りきった。
(ii) 太郎は小説を10日間売り切った。
この場合、時間量を初めから達成する目標（予定）として立てて、「10分間」「10日間」その行為を行ったということを意味している。この点については、以下のように「完～する」と異なる。詳しくは別稿に譲る。
(iii) *太郎はトラックを10分間完走した。
(iv) *太郎は小説を10日間完売した。
 13. 「完～する」には、自動詞の限界的事象の「完治する」「完熟する」「完投する」「完勝／完敗する」などもある。これらにおいては、「治る」「熟する」における程度があり、そ

れにおいて最後の点まで至ったことを意味する。「投げる」「勝つ」「負ける」においても同様の分析ができるであろう。他動詞で目的語を取る場合は、いずれも（予定していたものを）「残らず、最後まで」という意味が含まれる。

14. この「～きる」における数量詞の解釈について、姫野（1999）に、石井（1988）の興味深い指摘として、次のような説明があり、これを踏まえると「～きる」における達成量とは、さまざまな事象において消費する量と言えるであろう。（石井からの引用を含む。）…石井論文（1988b: 291）には、興味深い指摘がある。例えば、「燃料を使いきる」において「きる」は、実は燃料が「きれる」（＝なくなる）という客体の《変化》を表している。『モノが無くなる』から『コトが完全に行われる』への変容を示すというのである。「～きる」に内包される、このような「ゼロへの《変化》性」が「～終わる」等との相違を示していると思われる。（姫野1999: 177,178）
15. 岩本（2008）において、「100冊の本」自身は（[+bounded] 素性を持つ）限界的な経路ではあるが、事象構造に導入されていく（「単一化」と呼ばれる）時の仕方により、非限界的な経路になり、その結果、事象全体も非限界的になる。そのまま、限界的なまま導入されると、事象全体が限界的になり、この意味で両義的である。
16. 「5杯のラーメンを3杯は食べきった」とすることは可能であろう。どのような場合に部分解釈が可能となるかは今後の課題とする。

参考文献

- Dowty, David. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67-3, 547-619.
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房
- 石井正彦（1988）「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化」『方言研究年報』30, 281-296
- Ishii, Yasuo. (1999) A note on floating quantifiers in Japanese. In: Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (Eds.) *Linguistics: In search of the human mind—A festschrift for Kazuko Inoue*, 236-267. Tokyo: Kaitakusha.
- 岩本遠億（2008）『事象アスペクト論』東京：開拓社
- 岩本遠億（2010）「経路移動事象の両義的限界性と増分性」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』5, 53-98. 東京：ひつじ書房
- Iwata, Seizi. (1999) Thematic parallels and non-parallels: contribution of field-specific properties. *Studia Linguistica* 531, 68-101.
- Jackendoff, Ray. (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification. *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- 影山太郎（2010）「移動の距離とアスペクト限定」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』5, 99-135. 東京：ひつじ書房

- 北原博雄（1999）「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のAspect論—」黒田成幸・中村捷（編）『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』163-200. 東京：くろしお出版
- 金田一春彦（1976）『日本語動詞のAspect』東京：むぎ書房
- 工藤真由美（1995）『Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房
- 三原健一（2004）『Aspect解釈と統語構造』東京：松柏社
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語分の研究』東京：明治書院
- 中村ちどり（2001）『日本語の時間表現』東京：くろしお出版
- 奥田靖雄（1977）「Aspectの研究をめぐって—金田一段階—」『宮城教育大学国語国文』8 [奥田（1985）『ことばの研究・序説』85-104. むぎ書房 所収]
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantics interface*. Dordrecht: Kluwer.
- 上原由美子（2002）「テイル文の概念構造」修士論文. 神田外語大学
- Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- Verkuyl, Henk. (1972) *On the compositional nature of the aspects*. Dordrecht: Foris.
- 由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た英語の動詞形成』東京：ひつじ書房

辞書

- 新村出（2008）（編著）『広辞苑（第六版）』東京：岩波書店